

動詞「くる」と「いく」の多義構造の違いについて

中山 健一
東京外国語大学大学院博士後期課程

要旨

現代日本語（東京方言）の動詞「くる」と「いく」は、さまざまな派生義をもつが、両者の派生義の発達させ方は、必ずしも同じではない。本稿では、「くる」と「いく」との基本義における性質の違い、および、それに起因する両者の多義構造の違いを明らかにする。特に本稿では、ガ格名詞や場所を表す名詞をはじめとする、共起する名詞の意味素性と格形式に着目し、多義の各々の意味を支える、構文的な構造を取り出し、タイプわけを行なう。その上で、「ガ格名詞のタイプ」、「空間移動での「経路」に、何がどのようになぞらえられているか」という2つの尺度から、各派生義の基本義との関連性の度合い、いわば、基本義との“距離”を明らかにする。

1. 本稿の目的

本研究は、言語資料から実例を収集・分析することにより、現代日本語（東京方言）における「くる」と「いく」の多義構造を明らかにすることを目的とする。動詞「くる」と「いく」は、単に空間移動を表すのみならず、さまざまな派生義を発達させているが、両者の派生義の発達させ方は、必ずしもパラレルに各派生義が1対1対応するものではない。本稿では、両者の基本義の相違、および、多義構造の違いを明らかにする。

多くの場合、多義語の意味構造の分析は、既存の辞書の語釈や執筆者の内省をもとに行なわれることが多く、そういった研究方法の場合、その語の実際の使われ方を客観的に記述しているとは言い難い。本研究では、実例を分析することによる実証的な記述を目指す。

「多義構造」の記述という点について、特に本稿では、多義的な意味を支える様々な言語環境・要因のうち¹、ガ格名詞や場所を表す名詞をはじめとする、共起する名詞の意味素性と格形式に着目し、多義の各々の意味を支える、構文的な構造（「【 】」で示す）を取り出し、タ

1 奥田（1967）などを参照。

イプわけを行なう。その上で、

- ・ガ格名詞のタイプ
 - ・空間移動での「経路」に、何が、どのようになぞらえられているか
- という2つの尺度から、各派生義の基本義との関連性の程度、いわば、基本義との“距離”を明らかにする。

2. 先行研究

管見の限り、大量の実例の分析に基づいて、「くる」「いく」の多義構造の記述をした研究は見当たらない。以下、本研究に関連する文献をいくつか挙げる。

2.1. 国語辞典等の記述

研究論文ではないが、一般向け国語辞典や、森田（1977）などの基礎語彙辞典では、多義の全体像の記述が試みられている。いくつかの代表的な国語辞典の記述の調査も行なったが、本稿では紙面の都合上、それらを1つ1つ挙げ、意味の項目の立て方や語釈の適切さを検証することはしない。別の機会に譲る。

2.2. 認知言語学の観点からの考察

大量の実例を集めての分析ではないが、認知言語学の観点を取り入れて「くる」の多義構造の分析を行なったものとして、山本（2000）がある。メタファーやメトミニーといった概念を用いて興味深い考察がなされているが、全ての多義的意味が網羅されているわけではない。また、「いく」については述べられていない。

2.3. 共起する場所名詞の格

「くる」「いく」を含めたさまざまな移動動詞について、それぞれがどんな格の場所名詞と共起するか、大量の実例を集めてその傾向を分析した研究がある。宮島（1986）、および、宮島論文をさらに発展させた李（2004）である。

宮島論文、李論文とも、空間移動を表す移動動詞の分析の一環として「くる」「いく」を扱っているため、空間移動を表す基本義のみが分析対象となっている。しかしながら、大量の実例を分析した上での考察は非常に説得的であり、本研究においても参考にすべきところが大きい。特に李論文について、考察の部分で詳しく取り上げる。

3. 分析方法

3.1. 使用した言語資料・実例数

使用した言語資料は、末尾ページの一覧のとおりである。できる限り、ジャンルの偏らないように配慮した。ただし、書き手／話し手の性別について、不明である新聞を除き、全て男性

となっている点で偏りがある。また、実際の会話の録音を言語資料として扱うことができなかったが、できるだけ生の会話の姿に近い文字資料として、対談が文字化されたものを利用した。事例の収集は、電子化資料は GREP 検索、紙媒体資料は手作業で行なった。GREP 検索の検索文字列、および、正規表現は、以下のとおりである。その際、検索結果のうち分析対象ではないものは、1つ1つチェックし削除した。

「くる」：「来」（通常の文字列検索）

「こ [ら|さ|れ|な|よ|い]」

「き [ま|て|た]」

「く [る|れ]」

「いく」：「行 [か|き|く|け|こ|っ]」

「逝 [か|き|く|け|こ|っ]」

「い [か|き|く|け|こ|っ]」

「ゆ [か|き|く|け|こ]」

本稿で分析した事例の数は、表1のとおりである。

表1 事例数（合計）

くる	678
いく	780

よって、まだ、十分な数の事例を分析したとは言えない段階である。そのため、事例には見当たらなかった派生義を補うための補助資料として、『大辞林（第3版）』の用例（事例ではなく、辞典執筆者による作例）、および、ウェブサイト（「ヤフー知恵袋」）から任意に採取した例を使用することがある。補助資料の用例は、「事例数」に含めない。

3.2. 分析対象の範囲

単独の自立語としての動詞「くる」「いく」は、表記（かな、漢字）を問わず、基本的に全て、分析の対象とする。また「ゆく」も含める。

ただし、以下は、分析の対象としない。

①他の品詞へ転成したもの（例：「東京行きの電車」）

②複合語などの一部

- ・複合動詞・複合名詞（例：行き詰る，行き方）

- ・他の語と組み合わせたり、全体で文法化（grammaticalization）しつつあるもの（「～しなければいけない」、「～するわけにはいかない」）

③特定の形で固定し、完全に別語となっているもの

- ・“降参・閉口”の意味の「まいる」（もとは「くる」の謙讓語の形に由来する）
- ・“不適切・不可”の意味の「いけない」、 “可能”の意味の「いける」（もとは「いく」の可能形に由来する）

④形態的にまったく別の形の、尊敬語・謙讓語の形

（「いらっしゃる」「まいる」「おいでになる」「おこしになる」）

これらは、人がガ格名詞の場合にしか使われないので、その多義のバリエーションが「くる」「いく」とは異なる。よって、本稿の目的に照らした場合、「くる」「いく」と同列に扱うことができないため、分析対象外とした。

慣用句は分析対象に含めているが、未だ十分な分析・位置づけの検討ができていない²。

なお、補助動詞としての「（～して）くる・いく」および「やってくる」も、合わせて調査中だが、本稿では扱わない。本動詞の多義と補助動詞の多義との関係については、別の機会に譲る。

3.3. 実例数のカウント方法

考察の際、「実例数」を示すことがあるが、その算出方法は以下のとおりである。

- ・共起する場所名詞の格を数える場合、それぞれの名詞について、格形式が明示されている名詞のみをカウントする。取り立て（「～は」「～なんか」など）、無助詞化、あるいは連体修飾節を受ける名詞となって、格形式が明示されない場合はカウントしない³。
- ・名詞の意味素性による分類の場合、その名詞が文中に必ずしも明示されていなくても、前後の文脈で明確な場合は、それに該当する例としてカウントする。
- ・「くる」「いく」の多義の各々の意味分類では、表面上完全に【 】で示す構文的構造に合致していなくても、そこに分類できるものは、含めてカウントする（名詞句が省略されていると考えられる場合など）。

以下、具体的な考察に入る。

4. 基本義

本節では、「くる」「いく」の基本義について考察する。

基本義での「くる」「いく」は、物理的な空間移動のみを表す。

以下、4.1節と4.2節で、基本義のうちの典型的なタイプについて考察する。その他に、実例数は少ないが、基本義のうちの非典型的・周辺のと言えるタイプも存在する。それらについては、4.3節で触れる。

² 本稿で考察がなされていない慣用句（実例あり）は、「年端もいかない」・「納得／満足がいく」。

³ この点、李（2004）でも同様。なお、本稿において、格の認定をこのように厳密に行なうのは、共起する場所名詞の格を数える場合のみである。

以下に、基本義（典型的なタイプ）の場合の構文的な構造を示す。（次節以降でも同様に、構文的な構造をはじめに示すことにする。）

【人／動物／具体物ガ 場所カラ 場所ニ／へ／マデ くる・いく】
【人ガ 場所ヲ いく・(くる)】
【人ガ 場所ノ方ニ／ノ方ヘ いく・(くる)】

4.1. 移動主体の意味素性

基本義（典型的なタイプ）においては、移動主体は、人・動物、あるいは具体物である。人・動物の場合、通常、自らの体を自ら動かすことによって、移動する。具体物の場合も、人ほど多くはないが、存在する。おもに、「バス」「電車」「自転車」など、人の操る道具であり、操る人も共に移動するような場合と、「手紙」「電報」「注文の品物」など、物自体は動くことができず、人などからの何らかの働きかけの結果として移動が引き起こされる場合がある。

表2 実例数（基本義の場合）

移動主体	人		動物		具体物 (乗り物等)		具体物 (自ら動かず)		合計
くる	465	91.5%	3	0.6%	21	4.1%	19	3.7%	508
いく	626	98.9%	1	0.2%	1	0.2%	5	0.8%	633

以下、それぞれ、例を挙げる。

〈人〉

- (1) 女たちは、沖合から舟でこの浅瀬に★来たのである。彼女たちの住む家は海辺の家ではなく、海岸をまわりこんで河に入り、河の流域のカンボンだ。(エビと日本人)
- (2) 原田瑞枝が受話器を置いて別の場所へ★行くのがわかった。やはりたいした用件もなく永い時間こうやって話をしているのはまづいような気配であった。(新橋烏森口青春篇)

〈動物〉

- (3) あちらこちらに人が水牛をつかって耕しています。水牛が動きだすと、白鷺が下りてきて、その背や角にとまります。そして、水牛が田の端まで★きてそこに立ちどまると、人は押していた鋤のむきをかえ、鷺はそれにおどろいて舞いたちます。(ビルマの堅琴)
- (4) 「…ということは、右の方へ移動しながら糞をしたのだな。つまり、ライオンは五時間前にここをとおって右の方へ★行ったのだ。イライラしてるから、あちこち道草をくう。…」(ブンとフン)

〈具体物（乗り物等）〉

- (5) しかし、彼とこれ以上話すことには耐えられなかった。まして彼の厚顔な口説きがこれから始まるのだと思うとぞっとした。バスが早く★来てくればばいいと七瀬は願った。バスはもう十分以上遅れていた。(エディプスの恋人)
- (6) [※子どもがいたずらで、雪玉を駐車場の車に投げていることについて] 停車して上を見るのは、ボンネットかフロントガラスに当たった場合だけで、それでも十台のうち九台は★行ってしまうこと……。 (若き数学者のアメリカ)

〈具体物（自ら動かず）〉

- (7) 木村が二合徳利入りの爛酒を注文し、ハラダミズエは壁に貼られている墨文字の品書きを眺めはじめた。それぞれ注文の品物が★くると、それからまたしばらくぼくたちはハラダミズエもわかるような、二、三年前の出来事を思いだす、というような会話を続けた。(新橋烏森口青春篇)
- (8) 商社、水産会社が輸入した冷凍エビは、港の倉庫に入る。ここから国内流通が始まるのである。倉庫で通関手続きが終ると、エビは三つの方向に流れる。一番大きな流れは大手エビ問屋で、約七〇%がここに★行く。(エビと日本人)

実例では、「くる」「いく」とも、圧倒的多数が「人」である。よって、基本義の中で、もっとも典型的なのは、人が移動主体の場合である。

人以外の具体名詞については、実例数が少ないのでなんとも言えないが、「くる」の方が多く、「いく」では少ない。「具体物（自ら動かず）」としたタイプは、人の働きかけの結果として移動する点で、7.1節の①で取り上げる、移動主体が抽象物の場合と共通し、連続性が確認される。

4.2. 場所名詞の格

前述の李論文の調査によれば、「くる」「いく」が空間移動を表す場合に共起する場所名詞の格の出現頻度（李論文では「結合頻度」と呼ばれる）は、以下の通りだった。

表3 李（2004：12）の「表2 移動動詞と場所格の結合頻度」から「くる」「いく」の部分をもそのまま引用⁴

場所格 動詞	出発格				経過格				到着格				方向格		格結合数					用例数	
	カラ	ヲ	ヨリ	%	経由格			経路格		ニ	ヘ	マデ	%	ノ方ニ	ノ方ヘ	0	%	1	2		3
					カラ	ヲ	%	ヲ	%												
くる	229	—	—	7.0	—	—	—	26	0.8	612	549	93	38.5	2	30	1739	53.3	1501	20	—	3260
いく	38	—	—	0.8	—	—	—	114	2.3	1145	1828	157	63.9	32	133	1504	30.7	3345	51	—	4900

4 表中、右側の「格結合数」とは、いくつの「場所名詞句と結合している」かを表す。例えば、「彼は家から学校に行った」は格結合数2となる。

李論文では、多くの移動動詞を分析対象としているが、その中では「くる」と「いく」の差は大きくなく、ともに、「主に到着格とのみ結合する動詞」としている。

以下に、本稿執筆者の分析結果を、李論文を参考に、表にまとめる。なお、李論文にはないが、「～に向かって」も、方向格相当とした。

表4 空間移動の「くる」「いく」に共起する場所名詞の格⁵

場所格 動詞	出発格				経過格					到着格					方向格				格明示 なし	本節 該当 用例数
	カラ	ヲ	ヨリ	%	経路格			経路格		ニ	へ	マデ	ニ マデ	%	ノ方 ニ	ノ方 へ	ニ向 カッテ	%		
					カラ	ヲ	%	ヲ	%											
くる	44	—	—	8.7%	—	—	0%	2	0.4%	100	24	45	1	33.5%	—	—	—	0%	297	507
いく	8	—	—	1.3%	—	—	0%	7	1.1%	233	106	16	—	56.2%	10	2	1	2.1%	255	632

表3, 表4からわかることとして、まず、出発格との共起は「くる」の方が多く、到着格との共起は「いく」の方が多い⁶。これは、視点の違いによる。「くる」と「いく」の視点の違いは、大略、以下のとおりである(三上(1970), 森田(1977)など)。

表5 「くる」「いく」と視点

	動詞	出発点		到着点
A	「くる」	話し手の側でない	⇒	話し手の側
B	「いく」	話し手の側	⇒	話し手の側でない
C	「いく」	話し手の側でない	⇒	話し手の側でない

「くる」では、常に到着点側に話し手の視点が置かれるため(「A」)、到着点は自明であり、到着格が省略されやすく、「いく」は、「C」の場合もあるものの、「B」の場合には出発点側に話し手の視点が置かれるため、出発点は自明であり、出発格が省略されやすい。このことが反映されているのではないか。

以上のことに加えて、以下の2点を読み取ることができる。

- 「いく」は、「くる」に比べ、経路格のヲ格を取りやすい⁷。
- 「いく」は、「くる」に比べ、方向格を取りやすい。

5 合計数が、表2で示した数より、「くる」「いく」とも1例少ないが、これは、「場所を行ったり来たりする」(1例)を外したためである。また、李論文の言う「格結合数」について、「0」と「1」がほとんどで、「2」は「くる」「いく」ともに6例のみ、「3」以上はなかった。

6 「到着格」と一括りにしたが、それぞれについて見ると、へ格は「いく」に、マデ格は「くる」に偏っている。今回は詳しく考察しないが、興味深い偏りである。

7 なお、さらに詳しく見ると、ヲ格+いくでは、他の場所格と共起しない例が7例、「～に向かって」と共起する例が1例、ヲ格+くるでは、他の場所格と共起しない例が1例、到着格のニ格と共起する例が1例であった。

以下、ヲ格と共起する「いく」、方向格と共起する「いく」の例をあげる。

(9) たしかに肩のあたりで緊張していたけれど、ぼくは全身に意志をみなぎらせ、力をこめて歩いていった。両側の店のあかりで、通りを★いく人の顔はだいぶ遠くからでも認めることができた。通りは明るいけれど、その人工的な明るさは、なんとはなしの安堵のひとつでもあった。(新橋烏森口青春篇)

(10) 私はふらふらと歩きだしました。そして、洞穴の出口の方に★行きました。私はこのとき、漠然とながら、もうこの上はさらに一度イギリス軍の指揮官にたのんで、すこしでも時間をのばしてもらい他はない、と考えていたのです。(ビルマの豎琴)

つまり、たしかに「くる」「いく」とも、到着格と最も共起し、語彙的な意味として「方向性」(宮島(1986))をもつが、「くる」と「いく」を比較すると、「いく」の方がより経路格・方向格をとりやすく、到着点があいまいになることがあるのに対し、「くる」ではほとんどないと言えそうである。

以上、基本義のうち、典型的なタイプについて考察した。

4.3. 基本義のうち、非典型的・周辺のタイプ

以下は、空間移動を表し、かつ、空間移動以外に積極的にほかの意味を表さないのが、基本義に含めたが、典型的には空間移動とはいえない側面も持つ。

①移動主体が施設の場合

【施設ガ 場所ニ／へ くる・(いく)】

(11) 同時に、再編の全体像や狙いについても政府の説明は不十分だ。沖縄の海兵隊司令部がグアムに引き揚げるのに、なぜ米本土にある陸軍の広域司令部が神奈川県に★来るのか。広域司令部の機能は、日米安保の範囲である「極東」を超え、米国の世界戦略に歯止めなく組み込まれる恐れはないのか。(朝日新聞 社説)

ある空間に存在した具体物としての施設が、別の空間に存在するようになったことをさすため、空間移動と言える。しかし、厳密には、具体物としての施設(建造物など)がそのままの形で空間移動をしたわけではない。また、「施設」の建造物などは具体物であるが、社会においてある特定の機能を果たす組織としての「施設」は、具体物とは言いがたい側面をもつ。このため、典型的な空間移動とは言いがたい。

実例は、「くる」3例、「いく」0例である。なお、例(11)以外の実例のガ格名詞は「会社」、

「日本（この場合、「日本企業」のこと）」であった。

「いく」も、絶対に言えないわけではないが、実例数に偏りがあるのは確かである。

（ただし、本節に限らず、「くる」と「いく」との間の実例数の「偏り」は、複数の要因が関わり生じるもので、一概に比較できない側面をもつ。紙面の都合上、すべてについて詳しく言及できないが、具体的には、7.2節の①「時間への派生」でのみ詳しく述べる。）

②移動主体が現象の場合

【現象ガ（場所ニ／へ）くる・（いく）】

(12) 糸井：結局さ、海でつくる砂の城みたいなもんでさあ、／ぜったい壊れるってわかってるじゃない。／だけど、「ここまでスゴイのできた！」ってのを一生懸命つくればつくるほど、大波がバーンって★来たとき、／ウワーって気持ちいいじゃない。（糸井・矢沢対談）

(13) 私は登った。おどろかされた鳥の羽音の中を、わき目もふらずに、木の株を除けながら登った。何も考えないこの登攀が、たちまち私を癒やすのを感じた。頂上に着いたとき、涼しい夜風が★来て、汗にまみれた体を捲いた。（金閣寺）

ここでいう「現象」とは、「波／雨／台風／風」といったものである。単に具体物をさすのではなく、ある特定の状態にある具体物を表す名詞である。例えば、「波」は、水という具体物が、何らかの力により一方向に移動し、一部が隆起している状態をさす。具体物そのものの移動でない点で、典型的な空間移動とは言いがたい。さらに「風」などは、移動が視覚的に捉えられない点が、さらに典型性を低くする要因となっている。

現象を表す名詞（現象名詞）は、位置づけが難しく、いわば、具体名詞と抽象名詞との中間的な性格を持っている⁸。

実例は、「くる」6例、「いく」0例である。

「くる」においては、先の例のように、話し手や小説の主人公などが知覚者＝到着点となる場合がほとんどである（6例中、5例）。その場合は、到着格が現れにくい。「いく」の場合も、絶対に言えないわけではなさそうである（「風がいかないように戸をしめる」（大辞林））。しかしながら、用例数に偏りがあるのは確かである。

以上、基本義の「くる」「いく」について考察した。

⁸ 例えば『IPAL basic verbs』では、意味素性による名詞分類の際に、「現象」を具体名詞とも抽象名詞とも別にしている。

本節の最後に、基本義における「典型性」とガ格名詞の関係について、今一度まとめる。

厳密な意味で、移動主体が物理的に空間移動を行なうと言えるような、典型的な基本義では、ガ格名詞が人・動物・具体物となる。その中で、実例数が圧倒的に多いのは人であり、その点において、もっとも典型的なのは、ガ格名詞が人の場合であると言える。

空間移動を表すが、具体物そのものの空間移動とは言いがたい側面をもつタイプがある。ガ格名詞が「施設」の場合、および、「現象」の場合である。これらは、多義全体の中では基本義の1つに位置づけられるが、基本義の中では、非典型的・周辺的である。

5. 「基本義」と「派生義」について

5.1. 基本義と派生義との関係

一般に、「多義語は、基本的な意味が一つあって、それをもとにしてほかの意味が派生してできたものである」（『語彙教育』：28 ページ）。

基本義では、「くる」と「いく」はともに人や具体物の空間移動を表し、話し手の視点とのかかわりにおいて、前掲の表5のようにお互いに張り合っている。「くる」と「いく」とでペアをなし、日本語におけるダイクティックな体系の一部を構成している。

しかし、以下に詳しく見るように、派生義になると、その対立関係は、多かれ少なかれ崩れる。派生義によっては、「くる」と「いく」のどちらかにしかないものも少なくない。また、「くる」「いく」とも同様の派生義を持つ場合でも、実例数に偏りが見られるものもある⁹。

5.2. それぞれの派生義の、基本義からの“距離”

「くる」と「いく」の基本義について、以上の考察で見たように、基本義では、移動主体として現れる名詞は具体名詞であり、その中でも、もっとも典型的なのは、「人」である。また、表される動作は、空間的な移動である。

以上の2つの点で、典型的な基本義との違いが大きくなればなるほど、基本義との関連性が相対的に薄れる。いわば、基本義から“遠い”派生義となっていく。

つまり、「主体」（ガ格名詞）であれば、

・具体名詞 → 抽象名詞

という順に、より基本義から遠い派生義となる。動詞で表される動作等については、

・空間移動 → 空間移動+他の意味 → 非空間移動

9 むろん、「くる」と「いく」とで、実例の合計数が異なるので、厳密には数で比較をすることができないが、それぞれの派生義ごとの実例が少ないので、以下、%ではなく実例数で比較する。

という順に、より基本義から遠い派生義となっていく。

さらに、「非空間移動」は、(i)「出発点→経過点→到着点」という空間移動において移動主体がたどる「経路」が、“時間の流れ”や“人から人への働きかけ”など「経路」になぞらえて捉えることのできる他の概念へと置き換えられる場合と、(ii)基本義における出発点、経過点、到着点の一部が完全に捨象される場合、さらには、(iii)そもそも「経路」としては捉えられない場合がある。非空間移動の派生義の中でも、(i) → (ii) → (iii)の順に、より基本義から遠い派生義となる。

5.3. 派生義の考察の手順

以下、第6節から第8節にかけて、派生義の考察を行なう。まず、第6節で、ガ格の名詞が具体名詞（特に人）の場合について、第7節で、ガ格の名詞が抽象名詞の場合について考察する。それぞれについて、より基本義に近いものから遠いものへと順に考察していく。さらに、第8節で、「その他」として、ガ格名詞の制約が緩やかなタイプと、そもそもガ格名詞をとりえないタイプについて述べる。

なお、先に述べたように、必ずしも「くる」「いく」両方に同じような派生義が存在するとは限らない。それについては、「■「くる」「いく」両方■」、「■「くる」のみ■」、「■「いく」のみ■」と表示する。

6. 具体名詞（特に人）が主体の場合

本節では、ガ格名詞が人の場合の派生義について述べる。人以外の具体名詞の場合の派生義は、見られなかった。

6.1. 空間移動+他の意味

①組織への加入 ■「くる」「いく」両方■

【人ガ 組織ニ／へ くる・いく】

移動主体が人で、かつ、到着格の名詞が「大学」「会社」など、組織を表す名詞となると、その組織の敷地や建物への空間移動を表す場合と、その組織へ加入することを表す場合がある。以下、組織への加入を表す例である。

(14)「意外だなあ、お前がこんなに強いなんて。お前この会社に★来る前、どっかのバーかなんかでコレやってたんだろ。隠すなよなあ、そうでなきゃそのカードさばきうますぎるよオ」(新橋烏森口青春篇)

(15)一流大学の多くが私立であるため、州立大学に比べてはるかに多額の学資を必要とするから、いくら成績抜群な学生でも、親がよほどの金持でもなければ、遠くの一流大学に

は★行けず、地元の州立大学へ★行くからである。(若き数学者のアメリカ)

組織への加入を表す場合も、実際に通う、通勤する、という空間移動も行なっているが、空間移動ではなく、その組織へ加入が問題となっているため、派生義といえる。ただし、通勤・通学などの空間移動を伴わない場合「いく」は言えないので(例えば、学術的な学会に入会するという意味で「学会に行く」とは言えない)、完全に空間移動から他の意味に変わったとまでは言えないかもしれない。「空間移動」になるか、「組織への加入」になるかは、「大学」「会社」などの名詞のカテゴリカルな意味の違いに起因する(「カテゴリカルな意味」については、宮島(1996)などを参照)。

このタイプは、「くる」「いく」両方に見られるが、実例数は、「くる」が7例、「いく」が32例であった。

この他、組織を表す名詞を伴わず、上記の【 】に当てはまらないものの、「嫁にくる」(4例)・「嫁に行く」(1例)・「懲役に行く」(2例)も意味上、これに近いだろう。

6.2. 非空間移動

①死亡 ■「いく」のみ■

【人ガ 逝く ¹⁰ 】	(2例)
------------------------	------

生命は「あの世」と「この世」を行き来すると言う生死の観念・宗教観に基づき、それら2つの世界が空間的に捉えられ、死が空間移動になぞらえられている。

主体となるガ格名詞は、人に限られる。通常、ニ格名詞などは現れない。

(16) 吉本: まあ、糸井さんでもいいし、僕でもいいけども、／僕なら僕が、こう何だかんだ言いながら、／こうやって、それで、ぽっかりと、ぽっかりと、／そういうふう★逝っちゃったというふうになったら(糸井・吉本 対談)

「くる」については、派生義として固定したものは存在しないが、臨時的に、以下の例のような表現がなされることがある。

(17) 後で知りましたが、ビルマ人は死ぬことをおそろしいとは思っていません。人間は一度はかならず死ぬものだし、死ぬことによってこの世の煩惱を脱れて救われるのだ、人間がそこから★来た本源にかえるのだ、と信じています。(ビルマの豎琴)

10 漢字は通常、「逝」が用いられる。発音は、基本義をはじめ、他の意味では「いく」が主流であるのと違い「ゆく」が多く、「いく」となるのは非常に口語的な場合のみである。

②人からの働きかけ (1) ■「くる」のみ■

【人ガ 手段・方法デ くる】 (1例)

実例では典型的なものが見当たらなかったが、人からの働きかけを表す場合について述べる。山本(2000)で「対抗性」と呼ばれているもので、基本義の空間移動での出発点に働きかけを行なう人が、到着点に働きかけを受ける人がなぞらえられている。後述の、ガ格名詞が抽象名詞の場合の「人からの働きかけ(2)」と意味的に似ている部分がある。ガ格名詞は、話し手以外の人で、その人からの働きかけが何らかの形で話し手の側に及ぶことを表す。典型的な例としては、「[※将棋などのゲームで] その手できたか！」などである。

以下、非典型例であるが、見つかった実例(1例のみ)を挙げる。人ではなく国である点、視点、話し手というより、一時的に「中国」の側に置かれている点で、典型例とは言えない。

(18) 中国側も、日本の拒否は織り込み済みなのかもしれない。中国は春暁ガス田の開発にすでに巨額の資金を投じている。日本側がそこに手を突っ込む案で★くるなら、中国も極端な案で対抗する。交渉につきものの駆け引きとの見方もある。(朝日新聞 社説)

なお、構文的な構造は、後述の「④方法の選択」に似ているが、表される意味が異なり、別の派生義とした。

③複数の段階を含む一連の人間の活動 ■「いく」のみ■

【人ガ 抽象名詞(段階などを表す)ニ いく】 (1例)

複数の段階を含む一連の人間の活動において、その活動を行なうガ格名詞で表される人が、ある段階を終了して、次に行なうべき段階に着手するというような意味である。基本義での空間移動の「出発点→経過点→到着点」という「経路」が、その活動での開始から達成までの一連の個々の段階の連続に置き換えられている。

実例は少ないが、例えば、語学のクラスで、「(初級から)中級にいく」「次の課に行く」といった言い方など、普通に使われることの多い派生義だと思われる。

以下に、典型例とは言い難いが、見つかった実例を挙げる。

(19) 糸井: ぼくたちが本の世界から自由になったことは、／インターネットとも関係してると感じるんです。／本を捨てるには、代替物がなければ／捨てられなかったような気がして。／[中略]／荒俣: 次のステップに★行く時には、／何かを一度切り離さないといけない。(糸井・荒俣 対談)

④方法の選択 ■「いく」のみ■

【(人ガ) 手段・方法デ いく*】 (4例)

【(人ガ) 方法を表す副詞 いく*】 (2例)

*いきます／いこう／いくべき など、意志や当為を表す形式

人の行なう活動や行為の手段・方法のデ格を伴う。ガ格名詞は明示されないことがほとんどだが、多くの場合、話し手自身であり、動詞「いく」の形は、「いきます／いこう／いくべき」など、意志や当為を表す形式となる。ある活動・行為を、デ格名詞で表される方法を選択してとりかかる、開始することを表す。

この場合も、基本義の空間移動での「経路」は、人間の活動の段階に置き換えられているが、出発点相当に焦点が当てられている。

(20)「ここは、政策とか、作戦とか、戦略とか、そういう政治主義はいっさい捨てて、人間主義で★いくべきじゃないでしょうか。あなたはオリジナル・ブン、フン先生と特に親しいのだから、その友情で解決なさればいい。…」(ブンとフン)

デ格ではなく、方法を表すような副詞と共起する場合も見られる。実例では、「フェアに／めちゃくちゃに」が見られた。

(21)「まあその辺はフェアに★行こうじゃないの。俺はね、よそのメーカーにかき回されるよりも、うちとそっちとできっちり仕切った方が得だと思うんだ」(鉄道員：伽羅)

以上、ガ格名詞が人の場合についての派生義について述べた。

7. 抽象名詞

本節では、ガ格名詞が抽象名詞の場合について考察する。

7.1. 空間移動+他の意味

抽象名詞である以上、基本義のように、純粹に空間移動を表すことはない。しかし、実際には、何らかの空間移動を伴う場合もある。それでも、やはり、意味としては空間移動そのものを表すのではなく、派生義へと移行していると言える。

①人からの働きかけ (2) ■「くる」・「いく」両方■

【人からの働きかけガ 人カラ (人ニ) くる・(いく)】

第4節で見た、具体物の移動のうちの「手紙」「品物」類と同様、人から人への働きかけの移動だが、移動主体がもはや具体物ではない場合である。

実例は、「くる」14例、「いく」0例である。ただし、「いく」の場合も、「くる」に比べて少ないことは確かだが、絶対に言えないわけではなさそうである。

移動主体の名詞として、「注文」「抗議」「報告」「出演依頼」「電話」「(～せよという)サイン」などがあった。

(22) 「…デンバーにノーベル食品という卸しの食料品店があってその番号が四三三一六一一
一なので、やたらに間違い電話が多く、ひどい時には一日数回に及ぶこともある。しかも、
朝の七時前ぐっすり眠っている時に、どこかのレストランのおやじからピザ用のメリケン
粉の注文が★来たりするのだからね。…」(若き数学者のアメリカ)

実際は、なんらかの空間移動を伴うのが普通であり、(22)の例でも、実際は電気信号に変換された音声通过电话線を伝って移動するわけだが、しかし、カラ格・ニ格は、場所名詞ではなく、人であることから明らかなように、空間移動が問題なのではなく、あくまで、人から人への働きかけが問題となっている。空間移動の意味が、完全に失われたわけではないが、基本義とは別の派生義と言える。

②文化圏、分野間の混淆 ■「くる」のみ■

【抽象名詞ガ 言語・文化圏・分野カラ くる】

今回、実例では見当たらなかったが、「英語からきた外来語」(大辞林)のように、他の言語や文化から、特定の事柄が取り入れられることを表すことがある。

以下、任意採集の例を挙げる。

(補1) あのファッションはアメリカから★来たもので、よく日本はアメリカの流行を取り入れるのが早いと聞きます。韓国ではあと数年したら流行ると言われています。(ヤフー知恵袋)

(補2) 「ぎりぎりセーフ」という言葉は野球から★来た言葉なのではないでしょうか？(ヤフー知恵袋)

カラ格は、言語、文化圏、分野を表す名詞である。現段階ではなんとも言えないが、おそらく、ガ格相当名詞を被修飾名詞とする連体節の形をとる場合が多いと思われる。

以上のような例も、確かに、空間移動を伴う場合もあるが、しかし、カラ格名詞は、場所名詞ではない。(ただし、(補1)の「アメリカ」は場所名詞ではある。しかし、この場合は単に場所を表しているのではなく、「アメリカ」という文化圏を指している。) よって、空間移動

が問題なのではなく、あくまで、他文化・分野などからの取り込み、文化圏、分野間の混淆が問題なのである。①と同様、空間移動の意味が完全に失われたわけではないが、基本義とは別の派生義と言える。さらに、(補2)のように、空間移動とはまったく言えない例もある。

このようなタイプは「くる」に限られ、「いく」にはないようである。

7.2. 非空間移動

以下、ガ格名詞が抽象名詞で、まったく空間移動を表さないタイプについて述べる。5.2節で述べた、空間移動との関連において、基本義に近いものから遠いものへという順に見ていく。

①時間への派生 ■「くる」「いく」両方■

多義語において、空間から時間への意味変化は、よく見られる現象である。「くる」「いく」も、時間を表す派生義が存在する。すなわち、過去から現在、そして未来へという時間の流れを、一直線の道のように捉える。その上で、時間を、時間軸上を未来から現在を通して過去へと流れていくものとして捉えている。

空間移動での「経路」に時間の流れがなぞらえられているのだが、「くる」は到着点相当を現在、「いく」は出発点相当を現在とし、「くる」では基本義での出発点相当、「いく」では基本義での到着点相当が問題にされず、捨象される。

時間への派生には、次の「イ」～「ハ」のように、いくつかのタイプがある。

イ. 【特定の時間が くる・(いく)】	⇒時間の経過
ロ. 【状態が くる・(いく)】	⇒時間の経過+変化
ハ. 慣用的表現	⇒時間の経過+変化
【(抽象名詞が)ここに/ここへ/ここまで くる*】	
* 終止で使われることは少なく、多く「ここにきて、…」 「ここまできては、…」 などの形で使われる。	
【(抽象名詞が)このまま いく**】	
** 終止で使われることは少なく、多く「このままいけば、…」 などの形で使われる。	

まず、「くる」について述べる。

「イ」は、ガ格名詞が「時刻」「日」など、特定の時間を表す名詞の場合で、時間が流れ、その時点が現時点となることを表す。

(23) 私たちが粥座をすます前に、老師の出発の時刻が★来た。寺の者は玄関の前に整列して、見送るのが作法である。(金閣寺)

「ロ」は、ガ格名詞が単に特定の時期・時間を表す名詞ではなく、「平和」「不況」「飽き」など、ある状態を表す。この場合も、時間の流れとともに、その時になることを表すのだが、時の経過により変化が生じ、ガ格で示される名詞の状態になることを表す。言い換えると、その状態の“発生”とも言える。

(24) 「必ず不況が★来ると断言しているわけではない。そんな気がするだけのことだ。しかし、不景気への対策を用意しておけば、それに越したことはないではないか。…」(人民は弱し官吏は強し)

「イ」と「ロ」は、典型例では分けられるが、どちらにすべきか、悩む例もある。季節を表す語(例 25)や「～時代」(例 26)など、時を表す名詞であるものの、単なる特定の時というより、特定の状態の時を表すような場合である。

(25) じっさい、外は明るい陽が降りそそいでいた。強い光は初夏が★来たのを思わせた。上着を脱いで歩く者が多かった。(点と線)

(26) 私は更に追究して、これから想像もつかない新らしい時代が★来るかもしれない、と鶴川に言った。(金閣寺)

実例数は、「イ」と「ロ」あわせて、46 例である。

「ハ」は、やや慣用的な、決まった言い方である。例(27)は、ガ格名詞(「制度」)が現れているが、実例を見ると、ガ格名詞が現れないものがほとんどである。上の構文的な構造(【 Ⅱ】)で、「(抽象名詞ガ)」と括弧付きにしたのはそのためである。

(27) 背景には、退職者への手厚い年金や医療保険の負担がある。米国の自動車産業が繁栄を謳歌した 60 年代に充実させた制度が、ここに★きて重荷になっている。(朝日新聞社説)

次に、「いく」について述べる。「いく」は、「イ」「ロ」に該当する実例が見当たらなかった。おそらく、「行く春を惜しむ」(大辞林)など季節の場合と「行く年来る年」(大辞林)といった言い方に限られると思われる。「ハ」は、「このままいけば、…」がある。「くる」と同様、実例を見ると、ガ格名詞が現れないものがほとんどである。

(28) 個人消費や設備投資が堅調なうえ、輸出も増えている。このまま★いけば、10 月には戦後最長の 57 カ月に及んだ「いざなぎ景気」に並ぶ。(朝日新聞社説)

以上「時間への派生」について述べたが、「くる」と「いく」両方に見られるものの、大き

く「くる」に偏っていることがわかる。では、この「偏り」は何を意味するのだろうか。すくなくとも、次の2つのことが関わっている。

1つは、そもそも、「くる」「いく」の使用に限らず、「時の到来（“それ以前→その時”の時間的推移）」と「時の過ぎ去り（“その時→それ以後”の時間的推移）」を比較したときに、前者の方がより言語表現として言及されることが多いことである。

もう1つは、「時の到来」・「時の過ぎ去り」それぞれを表す、様々な語の体系（張り合い関係）の中で、「くる」と「いく」の占める位置づけが異なること、つまり、日本語の中に複数ある「時の到来」を表す語の中で「くる」が使われる頻度と、「時の過ぎ去り」を表す語の中で「いく」の使われる頻度を比べたとき、前者の方が高いということである。

上記の2つの要因が複合的に合わさった結果が、先に示した、「時間への派生」の「くる」と「いく」の実例数の差であり、厳密には、単純な比較ができないのである。他の節で述べる「くる」と「いく」の「偏り」にも同様の問題がある。

表6 [参考]「時の到来」・「時の過ぎ去り」を表す文の述語

名詞タイプ	ガ格名詞	「時の到来」	合計数	「時の過ぎ去り」	合計数
時間	夏休みが	始まる (2)/くる (1) /近づく (1)	19 (くる:12)	終わる (6)	6 (いく:0)
	正月が	くる (5)/間近である (1)		[※該当なし]	
	誕生日が	くる (6)/せまる (1)/間近になってくる (1)/近い (1)/		[※該当なし]	
季節	春が	くる (11)/やってくる (1)	35 (くる:24)	過ぎる (2) /終わる (1) / [初夏に] 移る (1)	13 (いく:0)
	夏が	くる (7)/やってくる (1)/近づく (1)/始まる (1)		終わる (5)/過ぎる (2)	
	秋が	くる (2)		[冬に] 移る (1)	
	冬が	くる (4)/やってくる (3)/近づく (2)/せまってくる (1)/始まる (1)		終わりがける (1)	
状態	不況が+不景気が	くる (1)/やってくる (1)/到来する (1)/起きる (1)	9 (くる:1)	[※該当なし]	0 (いく:0)
	平和が	訪れる (4)/実現する (1)		[※該当なし]	
		合計	63 (くる:37)	合計	19 (いく:0)

このことを示すものとして、あくまで参考としてだが、1つのデータを示す。

表6は、ある日本語データベースを使って¹¹、「夏休み／正月／誕生日／春／夏／秋／冬／不況／不景気／平和」という10語の名詞がガ格となる文¹²のうち、「時の到来」と「時の過ぎ去り」を表す場合、どんな述語が出現するか、および、その数を表したものである。全体数で「時の到来」が63、「時の過ぎ去り」が19と、やはりそもそもの全体数が大きく違っている。しかし、それでも、その中での「くる」と「いく」の使用頻度は、「くる」が38、「いく」が0であることから、やはり、「時の到来」・「時の過ぎ去り」それぞれの語彙の体系に占める位置づけが、「くる」と「いく」で異なっていると考えられる。

②物事の程度における基準への到達 ■「くる」「いく」両方■

【抽象名詞ガ 抽象名詞(二) マデ くる】 (1例)

【抽象名詞ガ 抽象名詞マデ／トマデ いく*】 (4例)

*「トマデ」の場合、「いく」は否定となる。 (3例)

【抽象名詞ガ 数二 いく】

例が少ないので(くる:1例/いく:7例)、一般化が難しいが、ここに挙げるのは、空間移動での到着点相当が、物事の程度における尺度の、ある基準点へと置き換えられている場合である。出発点相当は、捨象されている。

- (29) 白いものが男の意識をさっと走った。七瀬が何もしないのに、男はまた絶叫した。恐怖が限界にまで★来ていた。(エディプスの恋人)
- (30) 鳥飼重太郎の手紙は、憂鬱な彼の心に一つの弾みをつけたことは確かである。しかし、それがまだ勇氣とまでは★行かない。示唆はあったが、抽象的に過ぎた。(点と線)
- (31) 一キロ当り一級品が五三〇〇ルピア、二級品が四七〇〇ルピア、小さなブラウン(sitto)だと七〇〇ルピアにしかならない。今日は小さいのが半分位で一〇キロだから、三万ルピアに★いくかいかないかだ。(エビと日本人)

③活動・行為などの進捗 ■「いく」のみ■

【抽象名詞(活動・行為)ガ 副詞 いく】 (44例)

11 国立国語研究所の「言語コーパス整備計画」の一環として試験公開しているコーパス検索サービス。白書、ヤフー知恵袋、書籍、国会議事録からなるコーパス。<http://www.kotonoha.gr.jp/demo/>。

12 「それぞれの名詞+が」で文字列検索。それとは別に、連体節の「行く/ゆく/いく春」「行く/ゆく/いく年」も検索したが、該当がなかった。アクセス日:2008年10月。

人間の活動・行為などの進捗を表す。この場合、基本義での出発点・到着点相当の事柄は問題とされず、進むことのみが焦点が当てられている。

(32) 山岸：研究者の条件のひとつは、体力だと思います。／いろいろなところで批判され
もしますし、／実験がどうしてもうまく★いかない時もありますし、／落ち込んだ時に、
どう乗り越えられるかというのは／とても大切だと思うんです。(糸井・山岸 対談)

共起する副詞として、「うまく／首尾よく／この調子で／文献どおりに／にっちもさっちも
(いかない)」などがある。

4.2 節で述べたように、基本義の場合である空間移動を表す「いく」は、経過点のヲ格と共起し、到着点があいまいになることもある。ここに挙げた「活動・行為などの進捗」のように、基本義での出発点・到着点に相当するものが問題とされない派生義が生まれるのは、「いく」の基本義のこういった性質とも関わると考えられる。

④原因と結果 ■「くる」のみ■

【抽象名詞（状態を表すものが多い）ガ 抽象名詞カラ くる】（20 例）

ガ格・カラ格ともに抽象名詞で、カラ格名詞は、ガ格名詞の表す事柄の原因を表す。

この場合、「くる」は連体修飾節の述語となり、その連体修飾節を受ける名詞がガ格相当名詞となる例が多い。（該当 20 例中 11 例。例 33 参照。）

(33) ずっと乾燥期でしたから、爽やかに晴れた日がつづき、森の中の作業は愉快でした。
だれも元気になってはたきました。このころになってようやく、みな、終戦後の心の打
撃や、むしあつい気候から★くる虚脱状態を脱していました。（ビルマの堅琴）

カラ格を伴う点で、本節で挙げる他の「くる」の派生義（後述の⑤・⑥）と違い特殊だが、これも、ある意味、「発生」と言える。

また、基本義との関連について、この「原因と結果」の場合、基本義における「経路」に、何がなぞらえられているのだろうか。原因を表す抽象名詞がカラ格なので、因果関係の「因→果」を、空間移動の「出発点→到着点」になぞらえているとも考えられるが、しかしそれでは、「果」がニ格名詞ではなくガ格名詞である点の説明がつかない。基本義での「出発点→経過点→到着点」という「経路」はうまく捉えられない。

⑤位置関係 ■「くる」のみ■

【抽象名詞ガ 位置ニ くる】

実例中には見られなかったが、「句読点が行の頭にこないようにする」(大辞林)、「本の目次は普通最初にくる」(大辞林)のように、位置関係を表す。空間的ではあるが、移動を伴わない単なる位置関係であり、基本義での「出発点→経過点→到着点」という「経路」はまったく捉えられない。共起するニ格は、到着点ではなくありかへ移行している。つまり、構文的にも、本来の基本義の「くる」とは異なり、「ある」「存在する」などの動詞と同じ構造をとっている。

⑥心理的、生理的状态の発生 ■「くる」のみ■

【身体部位ニ 状態ガ くる】

【副詞(オノマトペ)ト くる】

実例中には、典型的な例が見当たらなかったのだが、「体のあちこちにガタがくる」(大辞林)、「手にしびれがくる」(補3)などの言い方がある。

(補3) 頸椎に異状があると手にしびれが★くることがありますので整形外科に受診されては如何でしょうか。(ヤフー知恵袋)

このタイプでは、ガ格名詞で表される状態が発生することを表す。よって、基本義での移動の出発点と経過点に相当する事柄は捨象され、さらに、基本義での「出発点→経過点→到着点」という「経路」はまったく捉えられない。共起するニ格は、到着点ではなく発生場所・ありかへ移行している。構文的構造も、「生じる」などと同じ構造である。

構文的な構造は異なるものの、意味的には、【副詞(オノマトペ)ト くる】もこれに近く、感情などの発生を表す。こちらは、実例が5例あった。慣用句の「頭にくる」も、ここに近いものとして位置づけられる。

(34) これで、ぴんと★来ました。乗船客名簿には石田部長の名はあるが、佐々木喜太郎の名はないのです。佐々木事務官が安田辰郎の名簿票を渡して乗船したことに間違いはないのです。(点と線)

8. その他

最後に、ガ格名詞として具体名詞も抽象名詞も同じように現れるタイプ、および、そもそもガ格名詞の現れないタイプを挙げる。ともに、空間移動は表されない、基本義から遠い派生義である。

8.1. ガ格名詞の制限がゆるやか

変化 ■「いく」のみ■

【～ガ ～方向ニ いく】	(6例)
【～ガ ～トコロニ いく】	(1例)

実例に見られたニ格名詞は、空間移動を表さないが、「方向」「ところ」など、もともと空間移動を表すような名詞であった。

空間移動での「経路」に、漸次的に推移する変化の段階がなぞらえられている。つまり、空間移動での「出発点→経過点→到着点」が、「変化前の段階→変化の進行の段階→変化後の段階」へと置き換えられている。

このタイプは「いく」のみである。実例は7例見つけたが、全て、同じ資料（「対談」）のものであった。このタイプの「いく」については、さらに実例を収集して考察する必要がある。

(35) 荒俣: 本は粘土板の頃がいちばんいいわけで、／それに、デザインも、年を経つにつれて、／どんだんだめな方向に★行ってるじゃないですか。(糸井・荒又 対談)

(36) 【※日本人の幸福観の変化について】 吉本: 昔流、昔っていうか、明治、大正流の、／何か末は博士か大臣かとかっていうのだけは、／もう、終わったろう。[中略] もう日本もきっと、少し、／そういうところに★行きつつあるって、／今の若い世代って、そういうふうになってんのかなあ／とも思いますしね。(糸井・吉本 対談)

「くる」について、変化達成後の段階に視点を置いて言う場合には、原理的に不可能ではないが、実際には言えそうにない。

8.2. ガ格名詞が現れない

観点・話題 ■「くる」「いく」両方■

【抽象名詞カラ いくと、…】	(1例)
【～ト きたら、…】	(2例)

慣用的表現【そこへいくと、…】	(1例)

この場合、動作主体としてのガ格名詞が、そもそも想定することができない点の特徴である。何かについて説明するときの観点をその説明部分に先立って導入したり、話題を提示したりする。これらの場合、ほとんど「くる」「いく」の基本義との関連が捉えられない。慣用的な、決まった言い方となっている。

【～ト きたら，…】のト格名詞は，話題となる事柄なので，具体名詞でも抽象名詞でもよく，制限が緩やかである。（なお，この【～ト きたら，…】については，岩男（2008）で論じられている。）

(37) 我に返ると，さて自分はどこに坐っていいものか躊躇してしまった。色の濃淡から★いくと，白人と黒人の中間あたりに坐るべきなのかな，と思ったりもしたが，…（若き数学者のアメリカ）

(38) 「うちの主人と★きたら，数学，山，そして私の順なんですよ」（若き数学者のアメリカ）

以上，第4節から第8節にかけて，具体的な考察を行なった。

9. まとめ

以上の考察の結果を，以下の表7にまとめる。

表において，「○」は，その意味を持つこと，「×」は持たないこと，「△」は，もう一方（「くる」なら「いく」，「いく」なら「くる」）と比較したときに，実例が極端に少ないことを表す。

それぞれの派生義と基本義との関係について，5.2節で述べたように，ガ格名詞が具体名詞→抽象名詞の順に，基本義から遠くなり，また，具体名詞・抽象名詞それぞれについて，大まかに言って，上から下にいくほど基本義から遠くなる。

また，派生義の基本義からの“距離”について，5.2節で以下の3つのタイプを挙げ，(i) → (ii) → (iii)の順に基本義から遠くなると述べた。

- (i) 「出発点→経過点→到着点」の「経路」が，他の概念へと置き換えられる
- (ii) 「経路」のうち，出発点，経過点，到着点の一部が完全に捨象される
- (iii) そもそも「経路」としては捉えられない

全てが，截然とこれら3つに分けられるわけではないが，あえて，派生義をこれら3つに分けてまとめると，表8ようになる。

表8で，□で囲った派生義は，「くる」と「いく」のどちらかにしかない派生義である。以下それらについて，非常に荒くではあるが，基本義との関係の点からまとめ，考察を締め括りたい。

(i) タイプは，基本義での「出発点→経過点→到着点」の「経路」に，明確な形で他の概念がなぞらえられている。それでも，「くる」「いく」が対応する形で派生義を発達させている

表7 全体のまとめ

	主体	意味タイプ	くる	いく	基本義との“距離”	
基本義	具体名詞 (人・具体物)	空間移動	○	○	基本義のうち 典型的なタイプ	
	具体名詞 (施設)	空間移動	○	△	基本義のうち非典型 的・周辺的なタイプ	
	現象名詞	空間移動	○	△		
派生義	具体名詞 (人)	空間移動+他の意味			近	↑ 近 ↓ 遠
		①組織への加入	○	○		
		非空間移動				
		①死亡	×	○		
		②人からの働きかけ(1)	○	×		
		③複数の段階を含む一連の人間の活動	×	○		
		④方法の選択	×	○		
	抽象名詞	空間移動+他の意味			遠	↑ 近 ↓ 遠
		①人からの働きかけ(2)	○	△		
		②文化圏, 分野間の混淆	○	×		
		非空間移動				
		①時間への派生	○	△		
		②物事の程度における基準への到達	○	○		
		③活動・行為などの進捗	×	○		
		④原因と結果	○	×		
	⑤位置関係	○	×			
	⑥心理的, 生理的状態の発生	○	×			
	その他	非空間移動			遠	—
[ガ格名詞の制限がゆるやか] 変化		×	○			
[ガ格名詞が現れない] 観点・話題		○	○			

わけではなく、「文化圏, 分野間の混淆」「死亡」については、日本語では、一方にしか見られない。ただし、「文化圏, 分野間の混淆」の「いく」や、「死亡」に対応する「誕生」の「くる」も、原理的に不可能なわけではなく、言語によってはあってもおかしくない派生義である¹³。「複数の段階を含む一連の人間の活動」も「いく」のみだが、活動の次の段階に視点を置けば、「くる」も可能かもしれない¹⁴。

「人への働きかけ」とした2つのタイプは、「くる」のみ、あるいは、「くる」に比べ「いく」が極端に少ない。

13 日本語においても、「生まれてくる」など、補助動詞としてなら可能である。

14 例えば、「何とかがんばって日本語中級に来たが、難しくてやめた」といった言い方をするとすれば。

表8 派生義の細分類

「くる」	「いく」
(i) タイプ ・組織への加入 ・人からの働きかけ (1) (ガ格:人) ・人からの働きかけ (2) (ガ格:抽象名詞) ・文化圏, 分野間の混淆	(i) タイプ ・組織への加入 ・死亡 ・複数の段階を含む一連の人間の活動 ・人からの働きかけ (2) (ガ格:抽象名詞) ・変化
(ii) タイプ ・時間への派生 ・物事の程度における基準への到達	(ii) タイプ ・方法の選択 ・時間への派生 ・物事の程度における基準への到達 ・活動・行為などの進捗
(iii) タイプ ・原因と結果 ・位置関係 ・心理的, 生理的状態の発生 ・観点・話題	(iii) タイプ ・観点・話題

※ □ は, 「くる」「いく」どちらかにしかない派生義

「変化」について, 変化達成後の段階に視点を置いて言う場合には「くる」も原理的に不可能ではないが, 実際にはない。

(ii) タイプで, 「活動・行為などの進捗」および「方法の選択」は, 「いく」のみに見られる派生義である。これに関して, 4.2節で, 基本義の場合である空間移動を表す「いく」は, 到着点があいまいになることがあることを述べた。派生義において, 「活動・行為などの進捗」のように基本義での出発点・到着点にあたるものが問題とされない派生義, および, 「方法の選択」のような, 基本義での出発点相当に焦点が当てられている派生義が生まれるのは, そういった基本義の性質が関わっているのではないか。

(iii) タイプで, 「くる」のみの3つの派生義はすべて, いわば「発生・存在」と括ることができるものである。この場合, 基本義での「出発点→経過点→到着点」のうち, 到着点相当に焦点があり, それ以外は完全に捨象され, そもそも「経路」を捉えることができないまでになっている。完全に「くる」独自の派生義である。「いく」にはない「くる」の意味派生の方向の1つとして, “「空間移動」から「発生・存在」へ” というのがあると考えられる。

10. 今後の課題

まだ分析した実例数が十分でないため、十分な考察ができていない派生義も存在する。今後、実例数を増やした上でのより精密な分析が必要である。

さらに、「多義構造」の記述という点について、「くる」「いく」の基本義における性質の違い、および、それに起因する両者の派生義の違い、各派生義と基本義との“距離”を記述できたと考えるが、さまざまな多義的意味の全体を、統一的に説明する原理の構築には至らなかった。

以上、今後の課題としたい。

参考文献

- 李 善姫 (2004) 「格結合頻度からみた移動動詞の語彙的意味」, 『日本研究教育年報』8: 1-27, 東京外国語大学 日本課程・留学生課 [共編].
- 岩男哲哲 (2008) 「「最近の若者ときたら…」一話者の思考と属性叙述」, 『言語』33/10: 52-59, 大修館書店.
- 奥田靖雄 (1967) 「語彙的な意味のあり方」, 『教育国語』8, 教育科学研究会 国語部会. [再録: 奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究・序説』3-20, むぎ書房.]
- 教科研東京国語部会 言語教育研究サークル (1964) 『語彙教育—その内容と方法—』, むぎ書房. [本文中では『語彙教育』と略記]
- 情報処理振興事業協会技術センター [編] (1987) 『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL (basic verbs) 解説編』. [本文中では『IPAL basic verbs』と略記]
- 三上 章 (1970) 「コソアド抄」, 『文法小論集』145-154, くろしお出版.
- 松村明・三省堂編修所 [編] (2006 [初版 1988]) 『大辞林 第三版』三省堂. [本文中では『大辞林』と略記]
- 宮島達夫 (1986) 「格支配の量的側面」宮地裕 [編], 『論集日本語研究 (一) 現代編』41-58, 明治書院.
- 宮島達夫 (1996) 「カテゴリー的多義性」, 鈴木泰・角田太作 [編] 『日本語文法の諸問題』29-52, ひつじ書房.
- 森田良行 (1977) 「いく」, 『基礎日本語 (角川小事典 7)』65-70, 角川書店.
- 山本裕子 (2000) 「くる」の多義構造—「くる」と「~てくる」の意味のつながり—, 『日本語教育』105: 11-20, 日本語教育学会.

言語資料 (全例収集)

1. 小説

- 浅田次郎 (1997) 『鉄道員 (ぼっばや)』集英社 (集英社文庫版, 2000年) / 井上ひさし (1970) 『ブンとフォン』CD-ROM版「新潮文庫の100冊」(1995年 ※以下「sin 100」と略記) / 筒井康隆 (1977) 『エディプスの恋人』sin 100 / 竹山道雄 (1948) 『ビルマの竖琴』sin 100 / 星 新一 (1967) 『人民は弱し官吏は強し』sin 100 / 松本清張 (1958) 『点と線』sin 100 / 三島由紀夫 (1956) 『金閣寺』sin 100

2. 随筆

椎名 誠 (1987) 『新橋烏森口青春篇』 sin 100／藤原正彦 (1977) 『若き数学者のアメリカ』 sin 100

3. 新聞

朝日新聞 朝刊「社説」2006年1月～2006年3月分, オンラインデータベース「聞蔵IIビジュアル」(アクセス: 2006年12月)

4. ルポ

村井吉敬 (1988) 『エビと日本人』, 岩波新書.

5. 対談

『ほぼ日刊イトイ新聞』 (<http://www.1101.com/>)

※コピーライターの糸井重里氏のウェブサイト。このサイト中の「アーカイブ一気読み」という過去の記事をまとめたページ (http://www.1101.com/dig_up/) を使用した。使用した対談は4編で、糸井氏と次の4人との対談。荒俣宏氏 (作家, 大学教員), 矢沢永吉氏 (ミュージシャン), 山岸俊男氏 (社会心理学者), 吉本隆明氏 (詩人, 評論家)。アクセス: 2008年5月。

言語資料 (任意収集の補助資料)

『Yahoo! 知恵袋』 (<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>)

※「ヤフー株式会社」の運営するウェブサイト。一般のインターネット利用者がお互いに、わからないことを質問したり、質問に回答したりできるサービス。本文中に挙げた例の正確なURLは、以下のとおり。アクセス: 2008年7月。

(補1): http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q_1113732421

(補2): http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q_137735163

(補3): http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q_1014502500